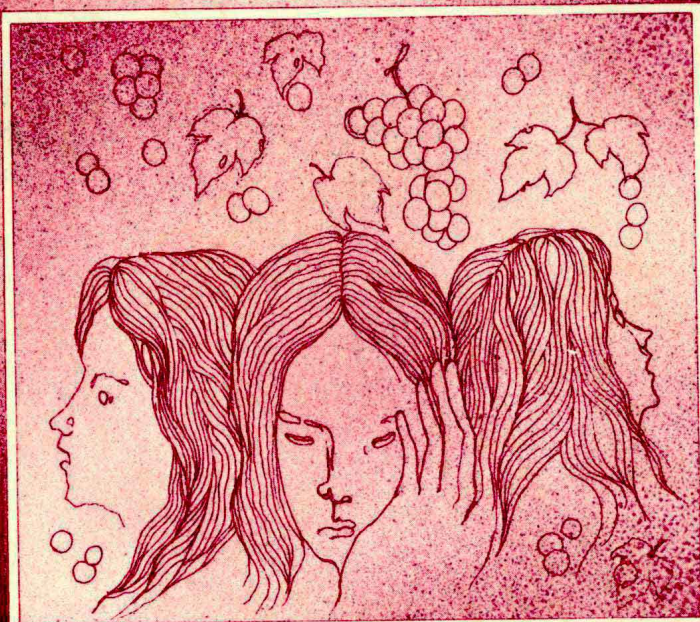


このヒロインたちの生き方

文芸評論家 巖谷大四



とき
朱鷺書房

名作のなかの女性たち
このヒロインたちの生き方
巖谷大四



朱鷺書房

このヒロインたちの生き方

著者*巖谷 大四
発行者*小森 保彦

発行所*女性の美と文化を創る **と き 朱鷺書房**

大阪市東淀川区西淡路町一―二二二

ビジネス新大阪/郵便番号五三三

電話〇六(三二三)三二九七

振替 大阪三六九九

東京都渋谷区神南一―二二一〇

皆川ビル/郵便番号一五〇

電話〇三(四六四)二九二二

印刷*第一印刷出版株式会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします。© DAISHI IWAYA

(分) 0095 (製) 01201 (出) 5353

1977

このヒロインたちの生き方——目次

第一章 名作のなかの妻たち・9

「人の掟」をこえて結び合う夫婦 夏目漱石著「門」のお米 11

不幸な出来事にも耐えて生きる 志賀直哉著「暗夜行路」の直子 17

みごとに描く心理のからみ 横光利一著「寝園」の奈奈江 24

心うたれる真摯な女の生き方 佐多稲子著「くれない」の明子 27

貧乏生活にもめげぬ妻の尊さ 尾崎一雄著「暢気眼鏡」の芳枝 30

旺盛な生活力の中にも哀愁が 織田作之助著「夫婦善哉」の蝶子 36

古い女の心の中にも尊い真実が 大佛次郎著「宗方姉妹」の節子 39

心のまよいに悩む人妻 大岡昇平著「武蔵野夫人」の道子 45

一家の主婦は縁の下の力持ちに 石坂洋次郎著「丘は花ざかり」の信子 51

官能に酔った女性の苦しみ 三島由紀夫著「美德のよるめき」の節子 57

人種問題の冷酷さに取り組む 有吉佐和子著「非色」の笑子 61

夫の情事に屈服しない清冽な『女の一生』 佐多稲子著「重き流れに」の尚子 67

愛の背景にひそむ戦争の影 五木寛之著「恋歌」の冬子 73

自尊心が招いた不幸な生涯 円地文子著「朱を奪うもの」の滋子 79

脈打つ『夫婦愛』の交流 近藤啓太郎著「微笑」の寿美 82

『自己のために生きる』新しい女性の生き方 芹沢光治良著「狭き門より」の美子 85

第二章 女性としての愛と生き方・89

「家」や「社会」にさからい通した女の生涯 有島武郎著「或る女」の葉子 91

嵐の中で若い苗木はどう育ったか 野上弥生子著「真知子」の真知子 94

心うたれる美しく誠実な青春 深田久弥著「津軽の野づら」の志乃 97

子どもが巣立つとき、母もまた…… 山本有三著「女の一生」の允子 101

さわやかな恋仇への友情 岸田国士著「暖流」の啓子、きん 104

人間味あふれる姉妹愛 谷崎潤一郎著「細雪」の姉妹 107

- 愛の遍歴の中で抱く疑問と悩み 伊藤整著「火の鳥」の生島エミ子 110
- 珠玉のような笑いと涙 壺井栄著「二十四の瞳」の大石先生 113
- あふれる「ごく平凡な」娘の魅力 源氏鶏太著「見事な娘」の桐子 116
- 挫折した弟へのひたむきな愛情 幸田文著「おとうと」のげん 119
- からみあう恋愛心理に描かれる女の生き方 井上靖著「地図にない島」の多加子 122
- 現代版「遊女のなれのはて」の物語 大岡昇平著「花影」の葉子 125
- 無実の罪を背負って生きる 大原富枝著「悪名高き女」の更科貴代 128
- 必死に生きる女の強さ 大原富枝著「婉という女」の野中婉 131
- 「明治の女」の厳しい生き方 芝木好子著「湯葉」の落 134
- ある戦後版シンデレラ姫 源氏鶏太著「御身」の矢沢章子 137
- 対照的な二人に描かれる女の性^{さが} 有吉佐和子著「香華」の郁代、朋子 140
- 戦後の女性の生き方にメス 吉屋信子著「女の年輪」の紀子 143
- 聡明な女性の哀しい真情 井上靖著「城砦」の江上透子 146

描かれた知的な女性の魅力 堀田善衛著「スフィックス」の節子 149

身はけがれても心は「竹の精」のように 水上勉著「越前竹人形」の玉枝 152

結婚とは、真の幸福とは何か 沢野久雄著「受胎告知」の草刈圭子 155

理想につき進む哀切の生涯 渡辺淳一著「花埋み」の荻野吟子 158

死床におくる涙の結婚衣裳 大原富枝著「めぐりあい」の菊代 161

事実にもとづく対照的な女の生きざま 宇野千代著「薄墨の桜」の高雄、芳乃 164

明るさとけなげさに生きる悲恋のロマン 船山馨著「花と濤」の夏江 167

細織りの女性に刻まれた戦争の傷あと 有吉佐和子著「鬼怒川」のチヨ 170

山の厳しさを通じ職業への心がまえをも 新田次郎著「銀嶺の人」の淑子と美佐子 173

変わらぬ愛を最後まで信じて 曾野綾子著「いま日は海に」の加陽子 176

第三章 古典に生きる日本の女性・179

現代にも通じる理想の女性 「竹取物語」のかぐや姫 181

夕顔の花のように散った戦乱の世の女性 「平家物語」の女たち 185

勝気な女性の屈折した愛情と嫉妬心 藤原道綱母著「蜻蛉日記」より 188

男の不遜さに抵抗した知的な女性の魅力 紫式部著「源氏物語」の空蟬 191

悲話に描かれた女のひたむきな誠心 近松門左衛門著「心中天網島」の小春とおさん 194

死を覚悟の恋に生きた封建時代の女性 井原西鶴著「好色五人女」の女たち 198

義理のしがらみにゆがめられた恋の結末 並木五瓶著「五大力恋織」の小万 201

下町の青春に描かれる愛と女の意地 樋口一葉著「たけくらべ」の美登利 204

第四章 読書に強くなろう・207

本の世界は地球よりも広く、美しい 209

読書のごろごころは教養の本にこそ 求めるとき、そこには〃生きた人間の声〃
が 真の書物は〃生きもの〃 生きた人間の声を聞くことが読書の第一歩

良書を見つける目は、読書の習慣から 216

実生活からだけでは学べないものがある　まず読むこと、そこから書を選ぶカ
ンが　良書はむずかしいのが当り前　むずかしくとも繰りかえし読むこと

著者の思想を安易に受け入れるな　223

人間が猿と違うゆえんは何か　功利主義的な読書は有害である　本は読んでも
読まれるな　読書の楽しみは思索し、迷うことにある

心静かにひとりで読んでこそ　230

読書は自分自身を知らせてくれる　良い本を読んだら他人にすすめよう　『集
団読書』は本来の道にはずれる　良書は永遠に失われない

書物は生命ある　『生きもの』　237

万事に通じる『本を大切にすること』　「本を放りだすことだけはやめてほしい」
下等な本は、読書家の書棚から自然に消える　本にも『快適な住まい』を

装幀・イラスト
巖谷 純介

第一章

名作のなかの妻たち

「人の掟」をこえて結び合う夫婦

夏目漱石著『門』のお米

漱石の名作の一つである『門』は明治四十三年三月から六月まで、東西の「朝日新聞」に連載された中編小説である。『三四郎』『それから』に続く三部作とされているもので、とくに『それから』の後日談とも言えるものだから、『それから』を読んでから、この作品を読むと解りやすい。

数年前、『門』はテレビ・ドラマとして放映されたが、その脚本は実にうまく『それから』と『門』をまぜあわせて、解りやすい物語にすることに成功していた。簡単にその筋を紹介すると次ぎの通りである。

——宗助とお米の夫婦は、陰気な崖下の借家に、下級官吏としてのつつましい生活を送っている。

二人は一緒になってから六年の年月を、まだ半日も気まずく暮したことはなく、よそ目

にはむつまじい幸福な夫婦に見えるが、それでいて二人はいつも心から晴れやかになることはない。それは二人が罪を犯したという意識を持っているからである。その罪というのは、お米は実は宗助の友人安井の妻であった。それがふとしたことから、宗助がお米に同情し、それがもとで二人は密通してしまふ。

当時は姦通は大罪であった。そのため宗助は家から、社会から葬られ、大学も中途退学し、親の死に目にも会えず、広島や福岡で苦勞をかさねて、ようやく東京に帰って来る。

宗助の父の遺産は叔父が管理し、宗助の弟の小六は叔父の世話になって高等学校に進んだが、叔父が死んだので学資を断われ、宗助に相談に来る。宗助はどうすることも出来ないが、お米の申し出で小六をひきとることにする。

ある日家主の坂井家に泥棒が入り、手文庫を宗助の家の庭に落していったのが縁となつて、宗助はたびたび坂井家を訪ねるようになる。

ところがある日、「^{アドベンチャー}冒険家」の坂井の弟が蒙古から帰って来るが、その連れが安井であることがわかり、宗助はおびえる。宗助は何も知らぬ坂井から、二人を紹介すると言われ、あわてて病氣といつわって招待を断わる。しかし、安井が東京にいるという恐怖におの

き、何とかしてその苦悩と不安から逃れようとして、到頭、鎌倉の禪寺に入り、坐禪をすることになる。

しかし、坐禪によっても心は晴れない。禪によっても救われない自分であることを悟り、門を通りもせず、また通らないですますことも出来ず「門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つ」不幸な人間であることを自覚して東京に帰る。

坂井の家を訪れると、安井はもう蒙古に帰ったあとであり、小六は坂井の書生として落ちつき、宗助は、役所でのちよつとしたいざこざも解消して、いささか昇給もして、お米と二人の上には再び小康がおとずれる――

『門』の発端は、秋日和の日曜の午後、宗助とお米の交わす会話で始まる。ひっそりと暮している、仲のいい夫婦の、秋日和の日曜の午後の感じが実に鮮やかに描かれている。

漱石は『門』で、宗助とお米を、往来に出て見れば、もうからからに乾いているのに、自分のうちへはいる路地はいつでも霜だけで、足駄をはかなければならないような、ろくに日もあたらない、暗いじめじめした崖下の借家にひっそりと住わせ、靴一足買うのにも、何か臨時の収入をまたなければならぬような、切りつめた生活を送らせている。そうし

て社会の片隅に小さくなって、お互いにお互いだけを頼りにして生きる生活をさせている。しかし、過去を忘れるというよりは、現在だけで生きようとしている、そしてその出来るお米は、それで充分に満足している。

宗助はそうはいかない。ともすると過去の罪に追いかけられる。そのため宗助には安き心がなく、刻々に自分の罪の呪いが、自分に肉薄して来ることを意識する。

どうにも道がなくなり、遂に友人の紹介状を持って鎌倉へ飛び出して行く。しかしそれでも「門」に入ることも出来ず、空しく帰って来る。

お米と宗助は、人に済まないことをしたために、社会の片隅に小さくなって暮している。彼等は外に向かって伸びようがないために、「内に向かって深く延び」、お互いから言えば「道義上切り離す事の出来ない一つの有機体になって」生活している。

宗助は、安井が出現しそうになっていることを、お米に決して一言も知らせない。それを自分の胸一つにたたみ込み、そのためあらゆる懊悩を重ねても、お米に実情を知らせようとしなない。それは宗助がお米を愛していたからであり、それを知らせることでお米の心をみだれさせたくないと思うからであった。